

## 大学生の調理実習における学びに関する研究(第4報)

～班員の性格特性が調理作業に及ぼす影響～

赤崎 真弓\* 池田まどか\*\* 鈴木 明子\*

(平成12年3月15日受理)

On "MANABI (Learning) " of the Students in the Cooking Practices (No. 4)

～ Affects of the Personality in the Group on the Cooking Operation ～

Mayumi AKASAKI\* Madoka IKEDA\*\* Akiko SUZUKI\*

(Received March.15,2000)

### 1. 研究目的

第3報<sup>3)</sup>では、目標設定および作業行為と性格特性との関係についての検討を行った。第1報<sup>1)</sup>、第2報<sup>2)</sup>と同学生を対象に16PF人格検査<sup>4)</sup>を行い、個々のもつ様々な性格因子を明らかにし、前2報で示唆された個々人の目標設定および作業行為の特徴との関係性を検討し、教師が、学習者ひとりひとりの学びの実態や傾向を把握し、適切な指導を行うための具体的な支援方法を提案した。

本報では、第1報で示したグループにおける班員の目標の関わり、第2報で行った班員の申告作業動作による班内行動の検討およびグループ作業の特徴に関連して、第3報で明らかにした個々の学生のもつ様々な性格因子が作り出している班の特徴を示し、班員同士の関わり方を検討するとともに、班員の特性が調理作業に及ぼす影響を明らかにする。また、対象者全体の各因子ごとの分布状態から対象者である大学生の性格特性をつかみ、学びを多く得られるような班を編成するための示唆を得ることを目的とした。

### 2. 研究方法

対象者およびその性格特性の測定方法は、第3報と同様である。16PF検査から得られた各班員のプロフィールをもとに、各班における班員同士の関わり方と班の特徴を考察した。また、各因子のステン得点の24名のばらつきを考察し、対象者の特徴を知る資料とした。さらに、班編成に利用した調理経験についての事前アンケートの分析を通して、班編成の方法についての示唆を得たい。

### 3. 結果および考察

#### 3-1 各班の特徴

表1は、分析対象者の因子別標準得点を班ごとにまとめ、各班の特徴をあらわす因子を示したものである。

A-1班の特徴としては、第二次因子のQⅢにおいて、Na.2とNa.8の学生の点数が高く、「行動的」という特性をもつ者が3人中2人いるということがあげられる。性格因子C, E, F, Hでも同じ2人の点数が高く、情緒安定、独断、軽率、物おじしない傾向がある2人と協力的で人目を気にするという特性をもつNa.22によって作業が行われている。

A-2班の特徴は、Na.7とNa.20が因子A, E, F, H, O, Q1, QⅠ, QⅢの8因子で対極の特性をもっているということである。Na.7が打ち解けやすく、独断的で、軽率、物おじせず自信もあり、革新的、外向性をもち行動的であるのに対し、Na.20は打ち解けにくく、謙虚で、慎重、物おじし自信がなく、保守的、内向的、心情的である。これに対し、もう1人のNa.18は、因子AではNa.7と、因子OではNa.20と同傾向を示す。また、他の2人の特徴を示す因子とは異なる因子C, Q3, QⅡで、情緒不安定、放縱的、高不安という特徴を示している。また、性格因子Iにおいて、Na.7, 18, 20の全員の点数が高く、3人とも「精神的に弱い(防衛的な情緒過敏)」であることがあげられる。

A-3班の特徴としては、因子Q2において、Na.23, 24の2人が得点が低く集団的であるのに対し、Na.9は個人的であることである。また、因子IでNa.9が精神的に弱いのに対し、Na.24は強い。因子QⅠでは、Na.9が内向的であるのに対し、Na.23は外向的である。このように相対する特徴が部分的にみられるが、性格因子Q1において全班員の点数が標準値である。他の6つの班では、各班に1人以上の低得点者あるいは高得点者がいる。したがって、因子Q1から、「特に保守的な傾向もなく、革新的な傾向もない」性格の3人であるといえる。

B-1班の特徴としては、第2次因子のQⅠと因子Fにおいて 全班員の点数が標準値であることがあげられる。他の6つの班では、各班に1人以上の低得点者あるいは高得点者がいる。したがって、QⅠから、「特に内向性の傾向もなく、外向性の傾向もない」性格であるといえる。また、Fから、「特に慎重な傾向もなく、軽率な傾向もない」性格であるといえる。因子Mでは、Na.15, 16, 17の得点が低く、現実的であり、因子Nでは、Na.5, 16, 17の学生が如才ないという特徴があらわれている。また、因子B, E, QⅢの値が、Na.15とNa.17の学生との間で対極にある。すなわち、Na.15の学生は3つの因子の値が高く、それとは反対にNa.17の学生の値が低い。

B-2班の特徴は、性格因子Aにおいて、全班員の点数が標準値であることである。他の6つの班では、各班に1人以上の低得点者あるいは高得点者がいる。したがって、性格因子Aから、「特に打ち解けない傾向もなく、打ち解ける傾向もない」という特徴といえる。因子C, E, Q2の値が、Na.3とNa.10の学生との間で対極にある。すなわち、因子C, Q2ではNa.3の学生の値は高く、Na.10の学生の値は低い。因子EではNa.3の学生の値は低く、Na.10の学生の値は高い。Na.3の学生は情緒安定で、謙虚であり、個人的であるのに対して、Na.10の学生は情緒不安定で、独断的であり、集団的である。

表1. 16PF検査結果による各班の特徴

▲…ス滕ン得点 7.5~10 ▼…ス滕ン得点 1~3.5

A-1班		A	B	C	E	F	G	H	I	L	M	N	O	Q1	Q2	Q3	Q4	QI	QII	QIII	QIV									
姓・名	対象者No.	2	5	▲	10	▲	10	▲	4	▲	9	▲	10	▼	1	4	▲	8	6	▼	1	5	▲	7.9	▼	3.0	▲	9.8	▲	10.3
		8	6	▲	9	▲	8	▲	9	▼	2	▲	8	6	6	4	6	3	5	7.1	4.3	▲	8.0	5.6						
		22	▲	9	6	6	4	7	▼	1	7	▲	9	5	5	7	6	4	4	6.3	4.9	3.8	6.0							

A-2班		A	B	C	E	F	G	H	I	L	M	N	O	Q1	Q2	Q3	Q4	QI	QII	QIII	QIV													
姓・名	対象者No.	7	▲	9	6	4	▲	8	▲	10	▲	8	▲	10	▲	9	7	▼	2	7	▼	3	▲	8	5	6	5	▲	10.7	▲	6.0	▲	9.0	6.9
		18	▲	8	5	▼	3	4	5	4	▲	8	▲	9	4	5	▲	8	5	5	▼	2	6	5.8	▲	8.7	4.6	4.7						
		20	▼	3	6	8	▼	1	▼	3	5	▼	3	▲	8	▼	3	6	▲	8	▲	8	▼	3	6	5	5	▼	1.3	5.9	▼	1.1	▼	2.5

A-3班		A	B	C	E	F	G	H	I	L	M	N	O	Q1	Q2	Q3	Q4	QI	QII	QIII	QIV								
姓・名	対象者No.	9	7	5	5	▼	3	4	6	4	▲	9	6	6	▲	10	5	6	▲	9	6	▼	2	▼	2.8	4.8	▼	2.8	5.6
		23	5	6	▲	8	6	▲	9	▲	10	7	5	6	▲	8	5	5	7	▼	3	5	5	▲	8.0	4.5	6.6	5.9	
		24	▲	8	6	7	▼	3	▲	8	6	5	▼	2	4	5	5	6	4	▼	3	4	5	7.0	5.1	4.3	▼	2.7	

B-1班		A	B	C	E	F	G	H	I	L	M	N	O	Q1	Q2	Q3	Q4	QI	QII	QIII	QIV								
姓・名	対象者No.	5	7	4	▼	3	6	5	6	6	5	7	6	▲	8	4	▼	3	5	6	5	6	5	6.2	5.8	6.8	5.4		
		15	▼	2	▲	10	6	▲	8	6	4	6	▼	3	5	▼	3	5	4	4	7	6	4	4.9	3.7	▲	7.8	5.8	
		16	7	5	7	5	4	7	6	5	▼	3	▲	10	7	▲	8	▲	9	5	6	5	6	5.0	5.9	5.9	6.1		
		17	7	▼	1	5	▼	3	4	▲	9	4	7	▼	3	▼	3	▲	8	6	5	6	6	4.8	4.0	▼	3.1	▼	2.8

B-2班		B	C	E	F	G	H	I	L	M	N	O	Q1	Q2	Q3	Q4	QI	QII	QIII	QIV											
姓・名	対象者No.	1	6	4	7	5	5	5	6	4	7	6	7	5	4	6	▼	3	4.9	4.3	3.7	4.8									
		3	7	5	▲	8	▼	3	▼	1	5	5	▼	2	6	6	▲	10	5	▼	3	▲	9	▲	8	4	▼	2.3	3.6	4.9	3.8
		6	5	7	5	5	5	5	▼	2	6	7	▼	3	7	7	▼	1	6	6	▲	9	4.3	▲	8.2	5.7	▼	3.2			
		10	5	5	▼	3	▲	9	5	5	7	▼	3	5	▼	3	4	7	7.2	6.9	▲	7.8	5.3								

B-3班		A	B	C	E	F	G	H	I	L	M	N	O	Q1	Q2	Q3	Q4	QI	QII	QIII	QIV								
姓・名	対象者No.	12	▲	9	▲	8	5	▲	10	▲	8	5	7	▲	9	7	4	5	5	6	7	4	7	▲	8.7	7.1	7.2	▲	8.1
		13	7	6	6	7	▲	8	▲	8	7	4	7	▼	2	▼	3	4	6	▲	9	4	6	▲	9.4	5.0	5.9	6.0	
		14	▲	10	5	▼	3	4	5	▼	2	4	5	7	5	6	6	▼	2	5	▼	2	▼	1	5.4	5.4	3.6	▼	3.2
		21	7	6	7	6	7	7	7	5	7	5	5	▼	2	5	6	▼	2	5	6	▼	2	5	▲	7.5	4.5	6.8	6.1

B-4班		A	B	C	E	F	G	H	I	L	M	N	O	Q1	Q2	Q3	Q4	QI	QII	QIII	QIV									
姓・名	対象者No.	4	▲	10	5	▼	3	▼	1	7	4	▲	8	5	▼	3	▲	8	5	▼	3	6	6	5	4.5	7.1	▼	2.5	▼	3.3
		11	5	6	4	5	4	4	4	▲	8	4	6	▲	8	▼	3	▲	9	5	▲	8	5	▲	8.0	6.5	▲	4.7		
		19	5	6	6	▼	3	▼	3	5	5	▼	3	6	▼	2	▲	10	5	4	▲	8	6	5	3.1	5.1	5.8	▼	3.0	

B-3班の特徴としては、第二次因子のQ Iにおいて、No.12, 13, 21の学生の点数が高く、「外向性」という特徴があげられる。また、Q IIIとMにおいても、全班員の点数がそろって標準的である。他の6つの班では、各班に1人以上の低得点者あるいは高得点者がいる。したがって、Q IIIから、「特に心情的な傾向もなく、行動的な傾向もない」性格であり、性格因子Mから、「特に現実的な傾向もなく、空想的な傾向もない」性格であるといえる。

B-4班の特徴としては、第2次因子のQ Iにおいて、No.11, 19の学生の点数が低く、「内向性」という特徴があげられる。No.4とNo.19の学生には、因子E, F, M, N, Q IVにおいて似た傾向がみられる。しかし、因子Iにおいて対極の特性を示している。謙虚で、慎重、現実的、如才ない、依存性が高いという点では似ているが、No.4は精神的に弱く、No.19は強い。

### 3-2 班員の特性が調理作業に及ぼす影響

第1報で行った設定目標の分析、第2報で行った班員の申告およびビデオ画像より行った調理作業分析を、3-1で述べた各班の特徴と照らし合わせて、再度考察を行ってみる。なお、ビデオ画像による分析を行ったのは、A-1, A-3班のみである。

A-1班の特徴(図1)は行動的なことである。設定目標の分析では、各班員がばらばらで関係を持たない状態であると考察している。班員の申告およびビデオ画像による調理作業分析では、調理実習の進め方として、No.2の学生の活動が中心となっていたことを示している。また、作業動作別にみると、No.22の学生は、「計量」「洗う」動作については、No.2より若干割合が高く、「調味」も他の学生よりその割合は高い。No.2とNo.22の学生の関係は、ビデオ画像から、No.22の学生が道具や材料を洗い、材料や調味料を計量して加熱までの準備を行っており、No.2の学生が洗ってある材料を切り、焼く、煮るなどの加熱の作業動作を行うという工程が見てとれた。このような状況が作り出されるのは、No.2の学生の特性として、行動的で独立性が高いことが主要因であると考えられる。そして、No.2の学生の行動に沿うような動きをしているNo.22の学生の協力的で人目を気にするという特性と、第二次因子に特別な傾向がみられないという特性によって、班内の調理作業における役割を決定したり、役割を分担していることが推察される。

A-3班の特徴(図2)は、因子Q 1において特に保守的な傾向もなく、革新的な傾向もない性格の3人であるといえる。設定目標の分析では、No.23の学生は班の中で個人的目標および具体的目標の数が最も多く、協力的目標も最も多いことから、自ら学ぶことのできる可能性が高い人であり、リーダー的存在であったのではないかと推察されている。班員の申告およびビデオ画像による調理作業分析では、3人のチャートの形が異なることが特徴である。また、作業にかかるまでの準備がA-1班より速く、計画的に行われ、片づけも、加熱などの工程と並行して行われており、協力して作業を行う体制ができあがっていたといえる。因子Q 1において安定していること、No.23が因子Gにおいて責任感が強い性格であること、No.23, 24が因子Q 2において集団的であること、No.9とNo.24が因子Eにおいて謙虚であることなどから、協力的で計画的な動きをする集団を作りやすいという特性をもっている班であるといえる。

以下の班は、ビデオ画像による分析は行っていない。

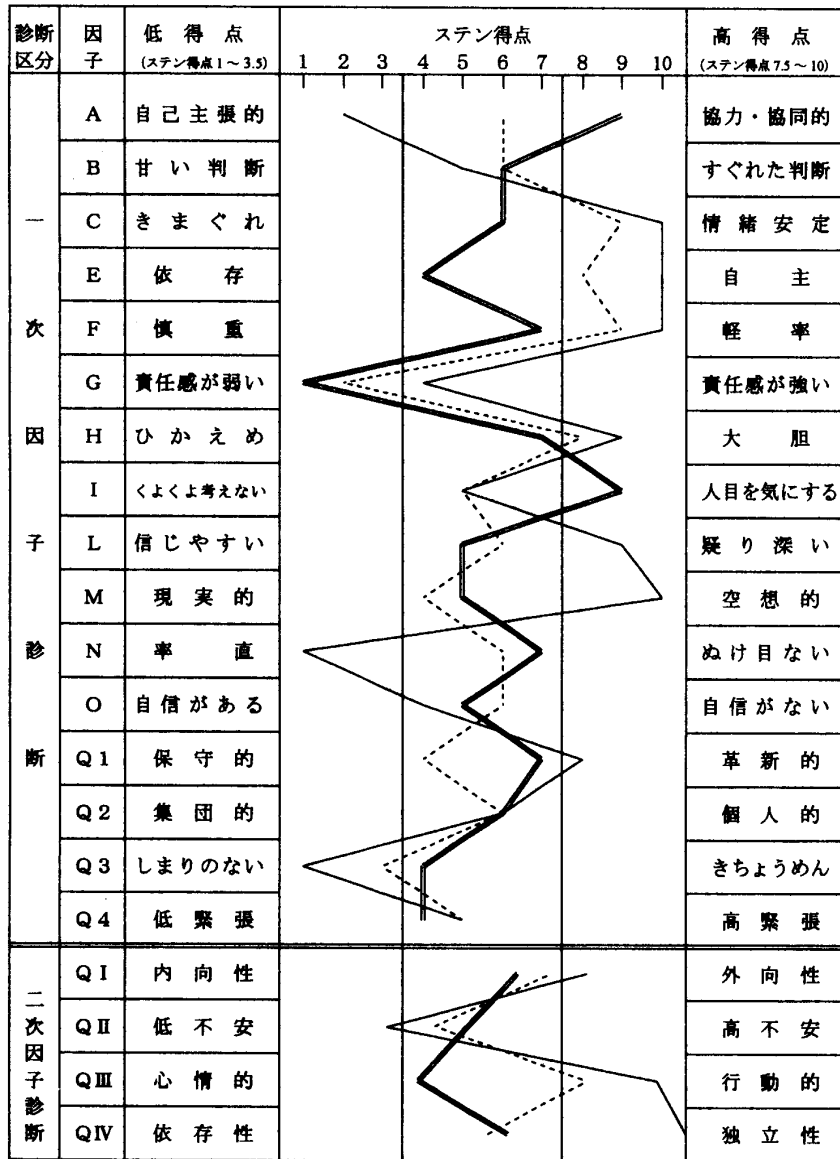


図1 16PF検査結果による班員のプロフィール (A-1班)

対象者  
 No. 2 ———  
 No. 8 - - - - -  
 No. 22 = = = = =

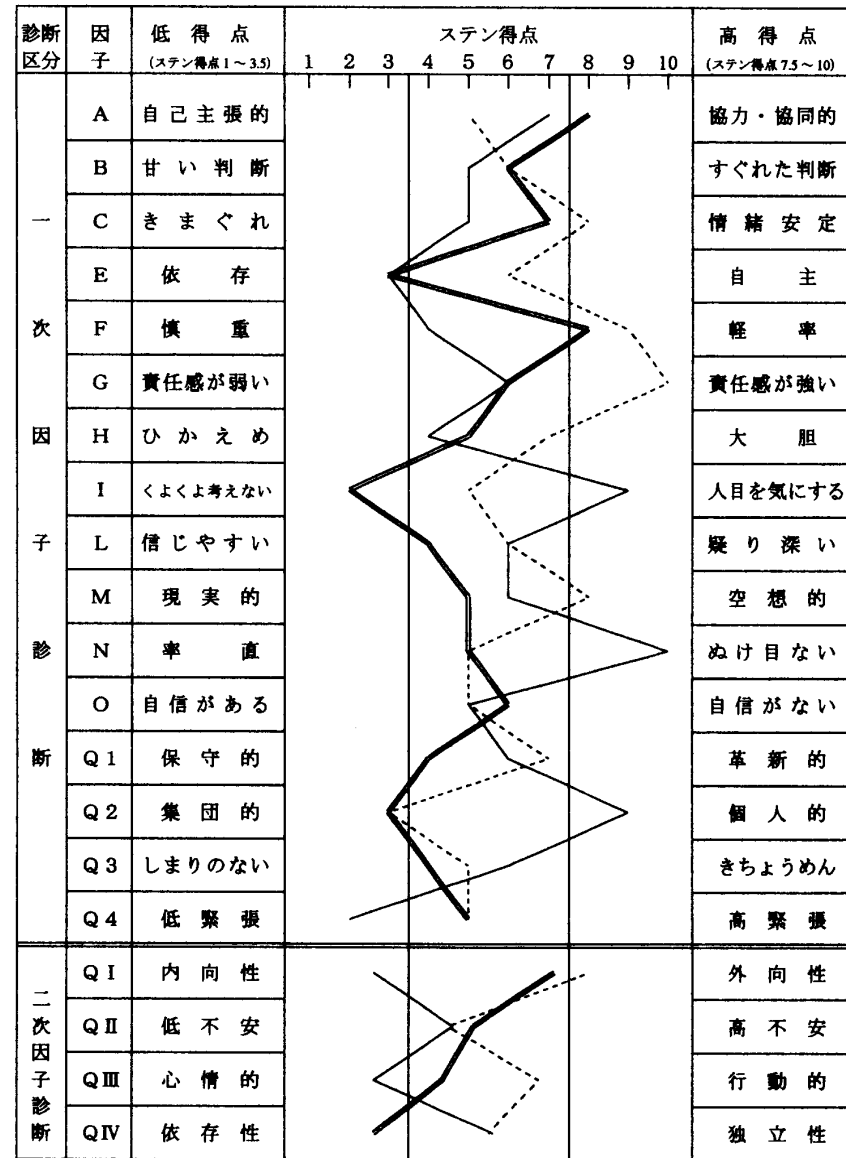


図2 16PF検査結果による班員のプロフィール (A-3班)

対象者  
 No. 9 ———  
 No. 23 - - - - -  
 No. 24 = = = = =

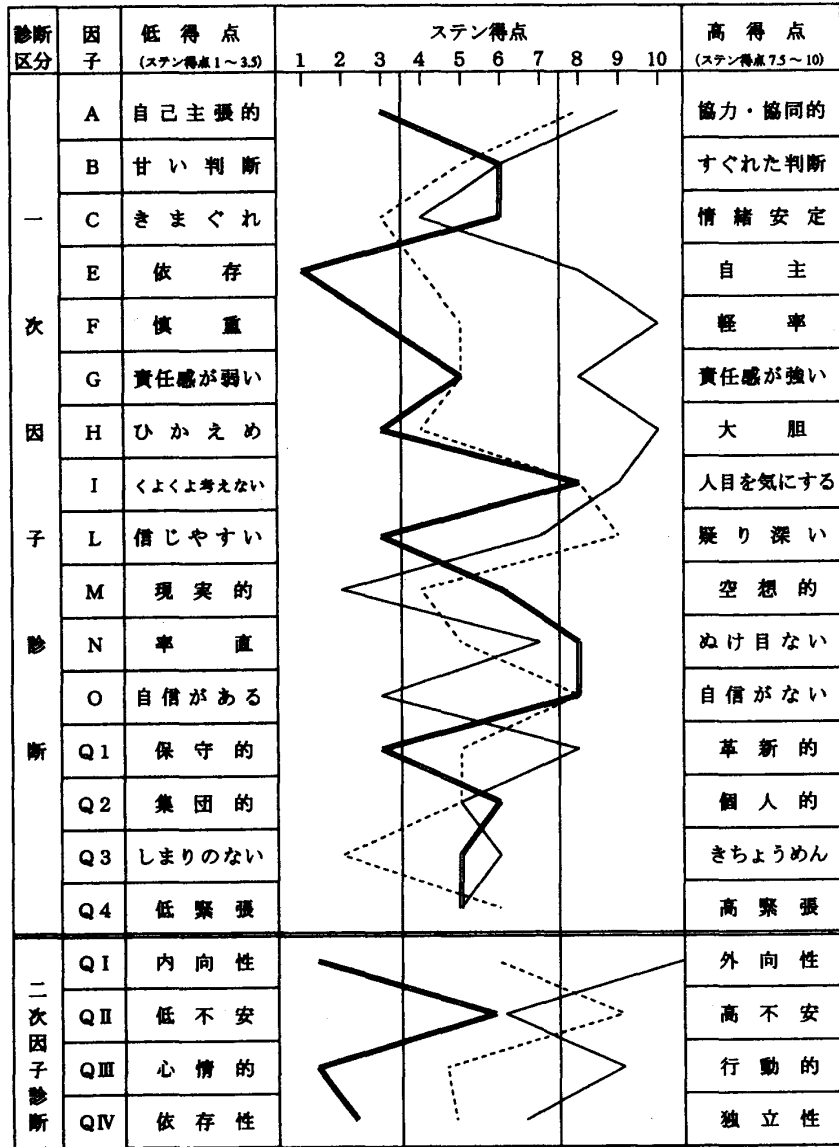


図3 16PF検査結果による班員のプロフィール (A-2班)

対象者  
 No. 7 —————  
 No. 15 - - - - -  
 No. 18 - - - - -  
 No. 20 —————

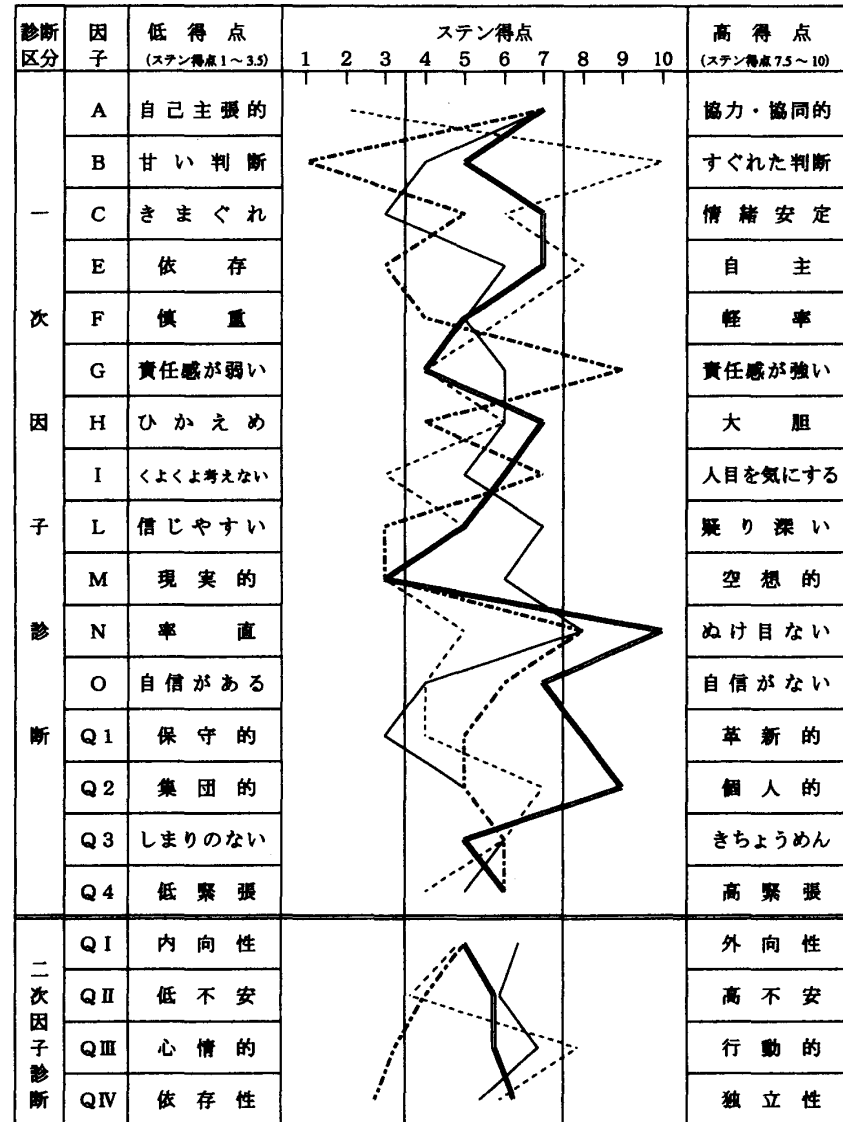


図4 16PF検査結果による班員のプロフィール (B-1班)

対象者  
 No. 5 —————  
 No. 15 - - - - -  
 No. 16 —————  
 No. 17 - - - - -

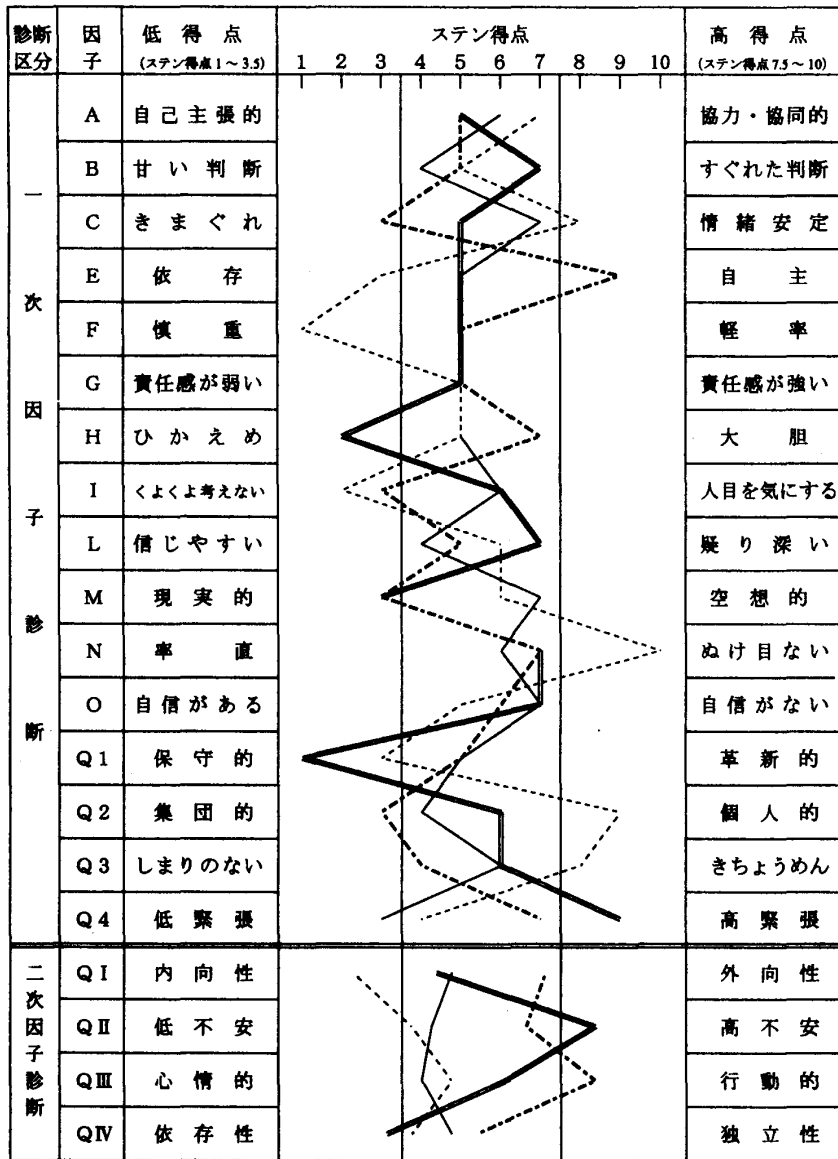


図5 16PF検査結果による班員のプロフィール (B-2班)

対象者  
 No. 1 ———  
 No. 3 - - - - -  
 No. 6 = = = = =  
 No. 10 ·····

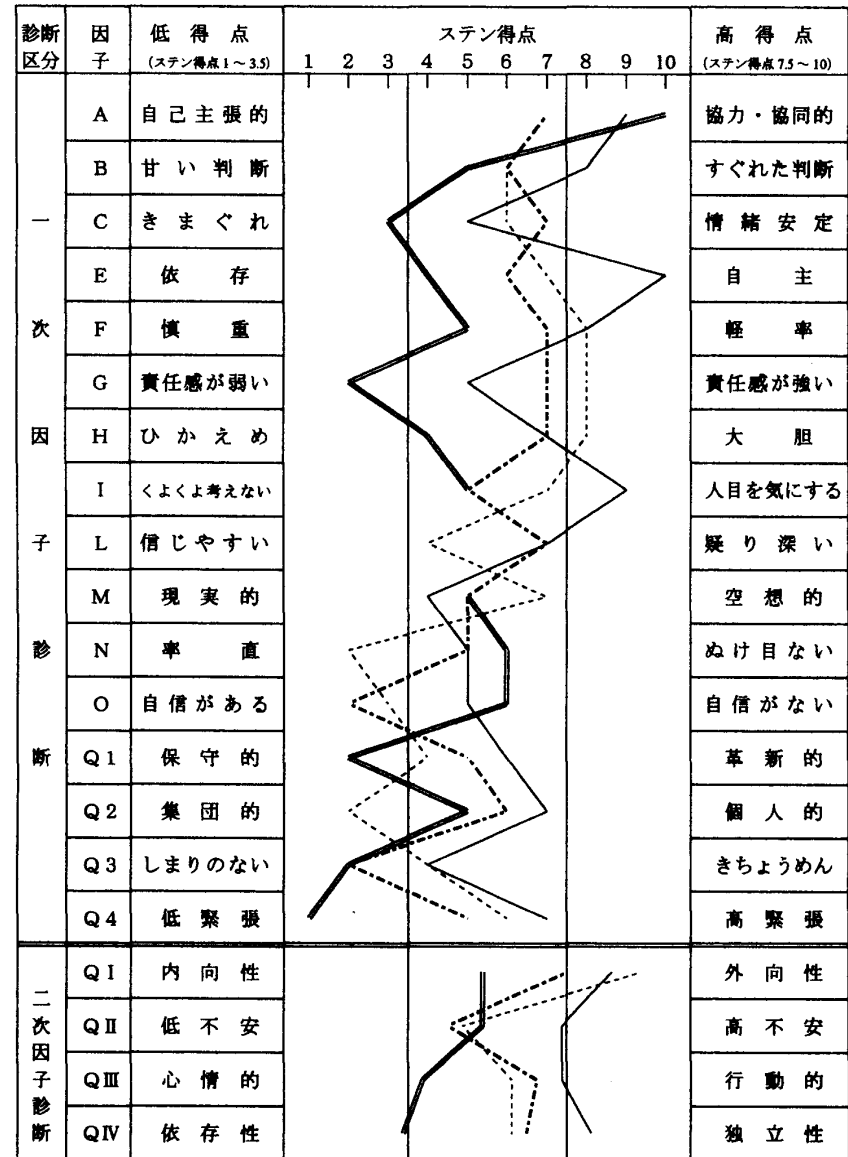
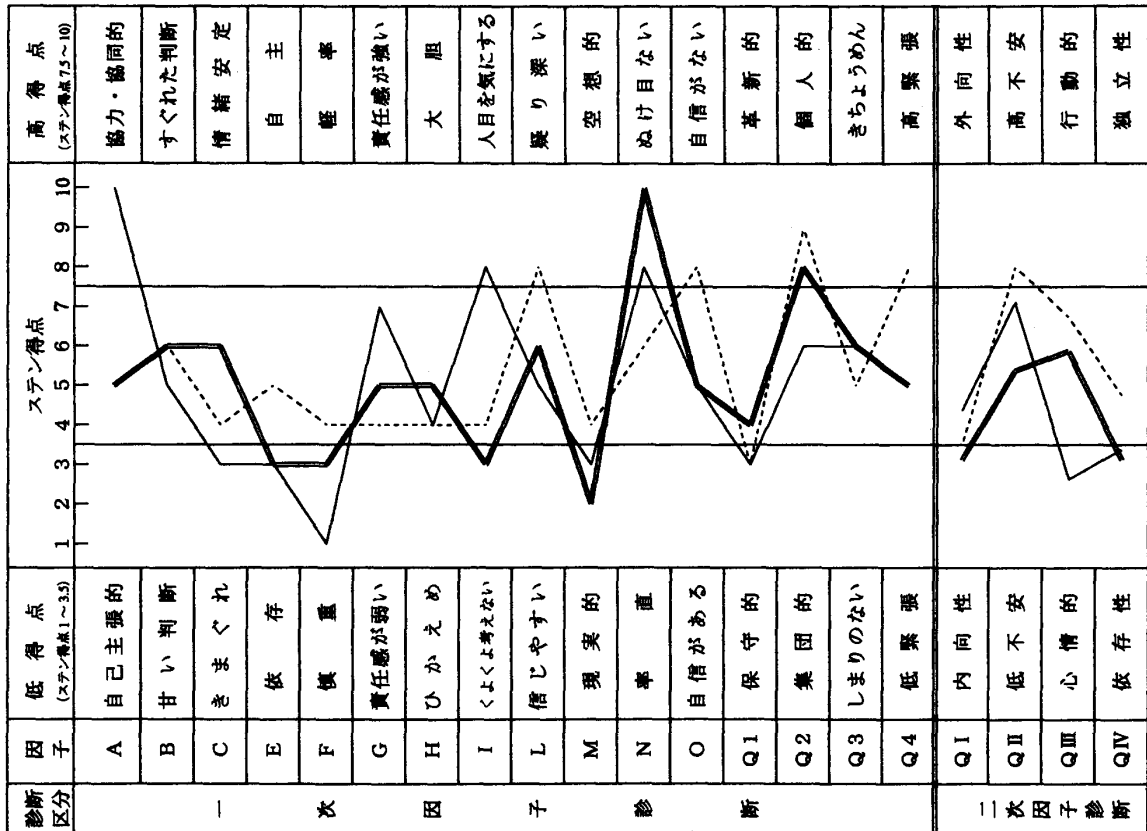


図6 16PF検査結果による班員のプロフィール (B-3班)

対象者  
 No. 12 ———  
 No. 13 - - - - -  
 No. 14 = = = = =  
 No. 21 ·····



対象者 No. 4 (実線) No. 11 (点線) No. 19 (太実線)  
 図7 16 PPF検査結果による班員のプロフィール (B-4班)

A-2班の特徴(図3)は、因子Iにおいて、精神的に弱い(防衛的な情緒過敏)ことである。設定目標の分析では、No.18の学生がA-3班のNo.23の学生と同じような働きをしており、リーダー的な存在であったのではないかと推測されている。No.20の学生は、第二次因子の中のQ I, Q III, Q IVにおいてそれぞれ内向性、心情性、依存性を示しており、反対にNo.7の学生がQ I, Q IIIにおいてそれぞれ外向性、行動性であることが示されている。No.18の学生は、Q IIにおいて高不安であることが判定されており、もともとリーダー的な役割を果たす性格ではないにもかかわらず、この3人の組み合わせの班においてリーダー的な役割を果たさざるを得なかったのではないと思われる。

B-1班の特徴(図4)は、第二次因子のうちのQ Iにおいて、全員の点数が標準値であることである。因子Mでは、No.15, 16, 17の得点が低く、現実的であり、因子Nでは、No.5, 16, 17の学生が如才ないという特徴があらわれている。また、因子B, E, Q IIIの値が、No.15とNo.17の学生との間で対極にある。すなわち、No.15の学生は3つの因子の値が高く、それとは反対にNo.17の学生の値が低い。このような対立した特性の2人がいる班ではあるが、特徴的な傾向のないNo.5とNo.16の2人がうまく調整をとり、班員の申告による調理作業分析では、明確な作業動作分担が行われている。

B-2班の特徴(図5)は、因子Aにおいて、全班員の点数が標準値であることである。設定目標の分析では、No.6の学生がA-2班のNo.18の学生と同じような働きをしており、リーダー的な存在であったのではないかと推測されている。しかし、因子C, E, Q 2の値が、No.3とNo.10の学生との間で対極にあることと、No.6の学生の第二次因子のQ IIの値が高く高不安の傾向があり、Q IVの値が低く依存的傾向がみられることから、調整的なリー



ダーの役割をしていたのはNo.1の学生ではないかと思われる。

B-3班の特徴(図6)は、第二次因子のうちのQ Iにおいて、外向的であり、Q IIIとMにおいて標準的であることである。設定目標の分析では、No.13の学生がリーダー的な存在であったのではないかと推測されている。外向的な特性を示すQ Iの数値を見てみると、No.13, No.12, No.21の順に高い。No.13の学生は集団的で率直、物おじしないという特性を示し、他の2人にはその特徴はみられないことから、No.13の学生は班員を引っ張る役目をするリーダーであって、他の2人は作業を進めていく役割を果たしているのではないかと推測される。

B-4班の特徴(図7)は、第二次因子のうちのQ Iにおいて内向性であり、Q IVにおいて依存性のある集団だということである。設定目標の分析で、No.4の学生がリーダー的な存在であったのではないかと推測されているのは、No.4の学生の因子Aの値がきわめて高く協同的であり、因子Nの値も高く如才ない特性によるものだと思われる。班員の申告による調理作業分析では、3人の作業数の差が最も小さく、明確な作業分担が行われていたと考えられる。

### 3-3 対象者全員の性格傾向

第3報では、母集団の平均と24名の各因子の平均を比較して集団特性を推察した結果として次のことをあげた。A因子、N因子が高い傾向にあり、M因子、Q 1およびQ 3因子が低い傾向にあることから、協同的でぬげ目がない、現実的で保守的であるが几帳面ではないという特徴である。しかし、このことは、集団として示される性格特性を表したのであって、構成員のばらつきを考慮した集団全体の平均的な性格特性についての分析は行っていない。

そこで、因子別の個々の性格傾向のばらつきをみるために、各性格因子において標準値からはずれる特徴のある性格特性をもつ人が少ない順に、各因子の分散の状況を、図8-1, 8-2に示した。第3報の表2に示した24名の因子別標準偏差値の低い順位とほぼ類似している。

特徴のある性格特性をもつ人が最も少なかった因子は、Bの「知的に弱い／知的に高い」で、3人であった。

次は、第二次因子のQ IIの「低不安／高不安」で、4人である。

次は、因子L, O, Q 4の「信じやすい／疑り深い」, 「自信がある／自信がない」, 「くつろぐ／固くなる」で、5人であった。

逆に、特徴のある性格特性をもつ者が最も多かったのは、因子Eの「謙虚／独断」で、13人であり、その内訳は7人の値が低く「謙虚」な性格特性をもち、6人の値が高く「独断」の性格をもっている。このように相反する性格をもった集団である。

次に多かったのは、因子Iの「精神的に強い／精神的に弱い」で12人であり、5人の値が低く「精神的に強い」という性格特性をもち、7人の値が高く「精神的に弱い」という性格特性を持っている。

この集団において、調理実習班を編成する際に配慮した方がよいと思われることは、集団においてみられた因子E, 因子Iのような特徴のある性格特性である。つまり、因子Eに同傾向が認められるNo.2, 7, 8, 10, 12, 15の学生を同一班にしたり、No.3, 4, 9,

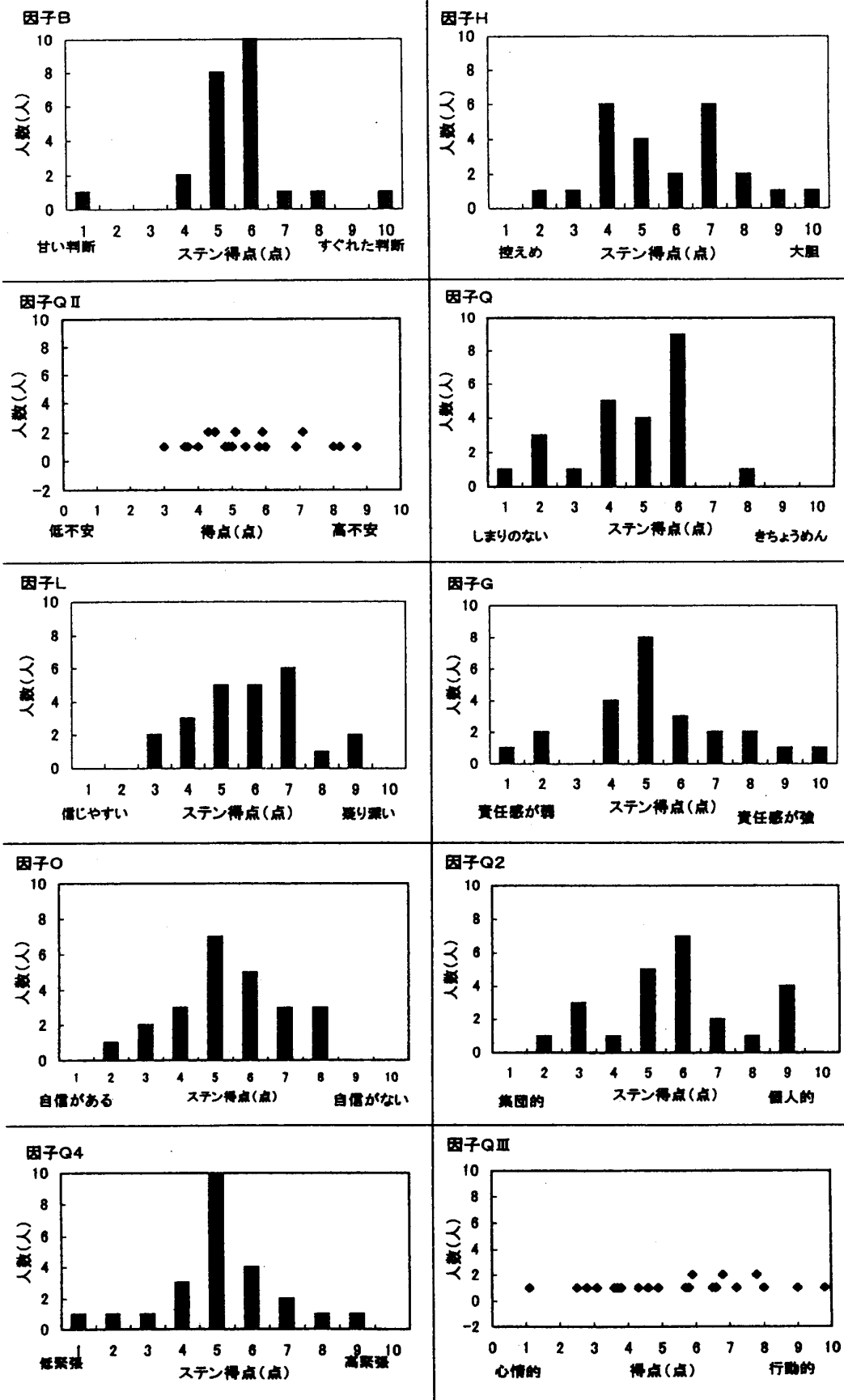


図8-1 対象者全員の性格特性の分布

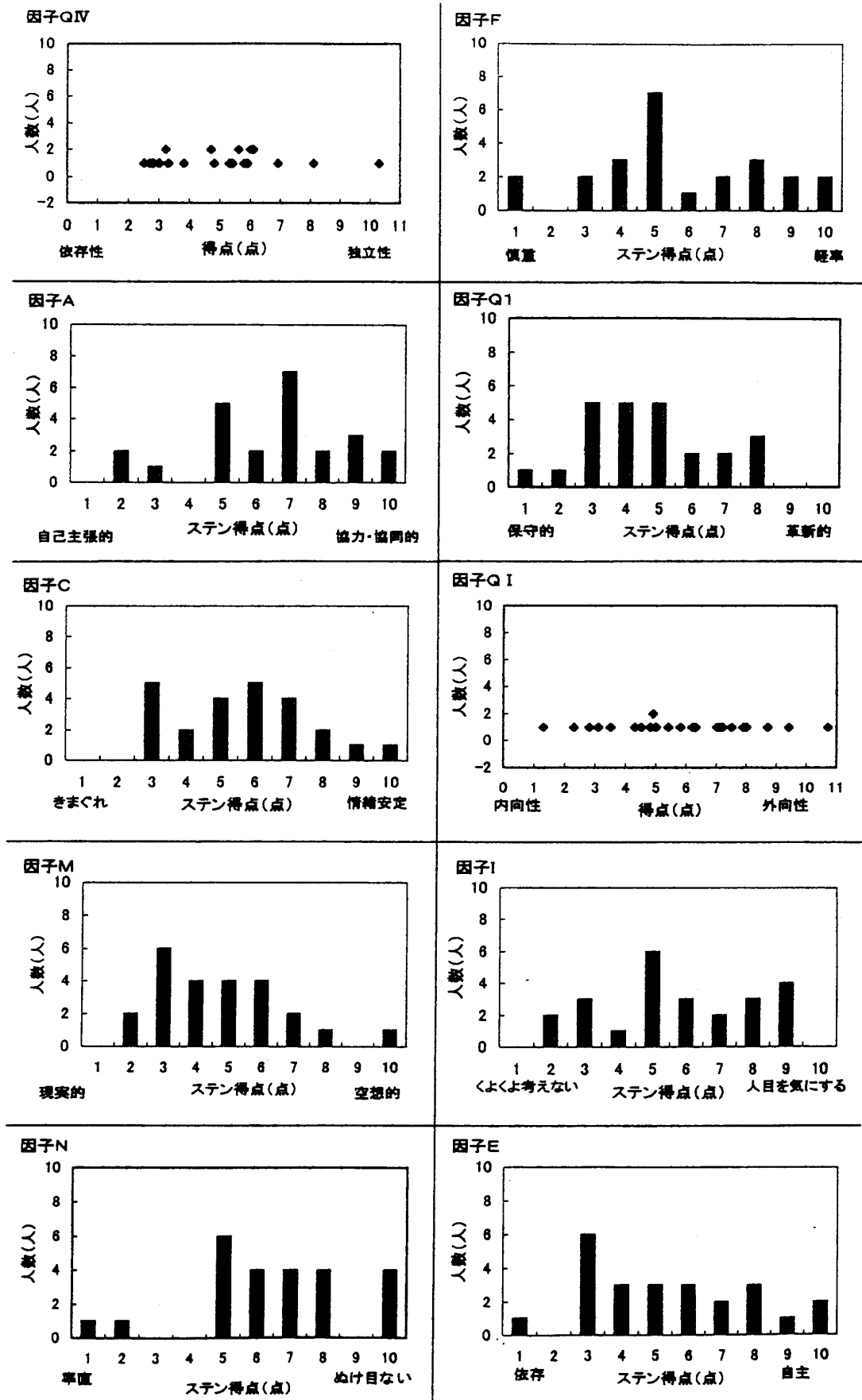


図8-2 対象者全員の性格特性の分布

表 2. 調理経験の調査結果 (事前アンケートより)

A-1班														
対象者No.	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14
2	3	3	3	-	-	-	3	1	1	1	1	1	1	2
8	2	1	3	-	-	-	3	1	1	1	3	1	1	3
22	2	1	2	1	1	3	1	1	1	2	2	2	1	1
A-2班														
対象者No.	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14
7	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1
18	2	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2
20	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	3	2	2
A-3班														
対象者No.	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14
9	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
23	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1
24	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
B-1班														
対象者No.	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14
5	3	1	3	-	-	-	2	2	2	2	2	2	2	2
15	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1
16	3	1	3	-	-	-	3	1	1	1	1	1	1	1
17	2	1	2	2	2	2	2	2	1	1	3	2	2	-
B-2班														
対象者No.	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14
1	2	1	2	2	2	2	2	2	2	1	2	1	1	1
3	2	1	2	2	2	2	1	3	2	2	2	2	2	1
6	2	1	2	2	1	1	1	2	2	1	1	1	1	-
10	2	1	2	2	1	1	1	2	1	1	2	3	2	1
B-3班														
対象者No.	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14
12	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	3	3	1
13	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
14	2	1	2	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	1
21	2	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	3	2	1
B-4班														
対象者No.	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14
4	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
11	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	1
19	2	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1

問1. 食事の為に買い物をしますか。  
 問2. 食事の準備をする前に手を洗いますか。  
 問3. 料理を作りますか。  
 問4. 料理の際、材料洗いをしますか。  
 問5. 料理の際、材料切りをしますか。  
 問6. 料理の際、材料を加熱しますか。  
 問7. できあがった料理を盛りつけますか。  
 問8. 食事の準備をしますか。  
 問9. 食事の食器を台所まで持っていくですか。  
 問10. 食器を洗いますか。  
 問11. 食器をふききますか。  
 問12. 食器を戸棚にしまえますか。  
 問13. 食べることは好きですか。  
 問14. 作ることは好きですか。

1:はい 2:時々orあまり 3:いいえ

17, 19, 20, 24の学生を集めないよう留意した方がよいだろうということである。

A-1班のようにNo.2とNo.8を同じ班にしたり, A-3班のようにNo.9とNo.24を同じ班にしたり, B-4班のようにNo.4とNo.19を同じ班にするより, A-2班, B-1班, B-2班のように相対する性格特性をもつ組み合わせを行った班編成の方が, ひとりひとりの学びを期待できるのではないかと思う。しかし, その他の因子との関連や学生の経験の差などを考えあわせたいうえで, 班編成を行わなければならない。

### 3-4 班編成

班員の人数によって, 作業量や参加度が異なることについて, 武藤氏<sup>6)</sup>は, 「あそびにつながる手まわりの発生率はグループの構成人数が多くなるにつれて多くなる。特に4人と3人の間に大きな差を生じた。……習熟の度合いはグループ構成人数の多い方が少ない」と報告している。

また, 学習者の性格と班編成の方法について, 増田氏<sup>7)</sup>らは, 「消極的な子どもの学習参加度は, 消極的な生徒同士のグループに属する方が高い」ことを示唆している。

さらに, 班編成における学習者の経験の考慮について, 田部井氏<sup>8)</sup>は, 「調理体験を多くする手段としては, 経験, 意欲, 関心の異なる男生徒と女生徒は班を分けて構成することが必要である」と指摘している。

本調理実習では班を, A-1班, A-2班, A-3班の3つの班と, B-1班, B-2班, B-3班, B-4班の4つに分け, A班とB班は別の曜日に授業を行った。この班編成は事前アンケート項目である対象者が申告した調理経験(表2)によって行った。

A-1班, B-1班の班員は経験の最も少ない者であり, A-3班, B-4班の班員は最も経験の多い者の集団である。問3の「料理を作りますか」に「いいえ」と答えたNo.2, 8, 5, 16の学生は, A-1班とB-1班に所属させた。また, 「はい」と答えたNo.9, 23, 24, 4, 11の学生はA-3班とB-4班に所属させた。No.20の学生も「はい」と答えているが, 問14の「作ることは好きですか」に対して「あまり好きではない」と答え, No.19の学生は問3に対して「時々作る」としているものの, 問14に対して「はい」と答えているので, No.19の学生をB-4班に所属させ, No.20の学生をA-2班に所属させた。

田部井氏が報告した経験, 意欲, 関心という要素でなく, 本調理実習のように事前の経験のみをもとに班編成を行ったことは, 性格特性との関係を考慮しても適切な方法であったといえる。

班員数としては, 人数の関係から3人の班と4人の班を作った。これについて武藤氏の報告と同様の結果が得られたことは, 第2報の表4を用いて考察している。

班編成における学習者の性格の考慮については, 本論の3-1から3-3において考察した通りである。性格特性に基づいて班編成する方法は, 上記2つの班編成の方法と組み合わせたいうえで行うとよいのではないかと推測される。

4. まとめ

本報では、第1報で示したグループにおける班員の目標の関わり、第2報で行った班員の申告作業動作による班内行動の検討およびグループ作業の特徴に関連して、第3報で明らかにした個々の学生のもつ様々な性格因子が、班の特徴を作り出していることを示し、班員同士の関わり方を検討した。

そこで明らかになったことは、個々の班員の性格特性が、所属する班における役割分担や作業の進め方に大きい影響を及ぼしていることである。性格特性が同じ傾向を示す者同士を組み合わせるより、異なる性格の傾向がみられる者を組み合わせる方が、多様な学びが期待できるのではないかと思われる。

今後は、さらに調理実習における学びと性格特性および班編成との関連について、詳しく分析をおこなっていきたいと思う。

註釈、引用・参考文献

- 1) 赤崎眞弓・池田まどか・鈴木明子：“大学生の調理実習における学びに関する研究（第1報）－目標を設定することについて－”，長崎大学教育学部紀要 No.34, 2000.3
- 2) 鈴木明子・池田まどか・赤崎眞弓：“大学生の調理実習における学びに関する研究（第2報）－調理作業の実態と認識－”，長崎大学教育学部紀要 No.34, 2000.3
- 3) 鈴木明子・池田まどか・赤崎眞弓：“大学生の調理実習における学びに関する研究（第3報）－目標設定および作業行為と性格特性との関係－”，長崎大学教育学部紀要 No.35, 2000.6
- 4) Samuel Karson・Jerry W.O' Dell, 伊沢秀而等訳：『16PFの臨床的利用』, 日本文化科学社, 1985.
- 5) 性格因子のAからQIVの因子ごとの低得点と高得点の場合の説明は次の通りである。

16PF検査における各因子の説明

診断区分	因子	(低得点 1~3.5)		(高得点 7.5~10)	
		16PF集計表説明	他の説明	16PF集計表説明	他の説明
一次因子診断	A	打ち解けない	自己主張的	打ち解ける	協力・協同的
	B	知的に低い	甘い判断	知的に高い	すぐれた判断
	C	情緒不安定	きまぐれ	情緒安定	—
	E	謙虚	依存	独断	自主
	F	慎重	—	軽率	—
	G	責任感が弱い	—	責任感が強い	—
	H	物おじする	ひかえめ	物おじしない	大胆
	I	精神的に強い	くよくよ考えない	精神的に弱い	人目を気にする
	L	信じやすい	—	疑り深い	—
	M	現実的	—	空想的	—
	N	率直	—	如才ない	ぬけ目ない
	O	自信がある	—	自信がない	—
	Q1	保守的	—	革新的	—
	Q2	集団的	—	個人的	—
Q3	放縱的	しまりのない	自立的	きちょうめん	
Q4	くつろぐ	低緊張	固くなる	高緊張	
二次因子診断	QI	内向性		外向性	
	QII	低不安		高不安	
	QIII	心情的		行動的	
	QIV	依存性		独立性	

- 6) 武藤八恵子：“調理におけるグループ学習の「手まち」”，日本家庭科教育学会誌 第21号，pp.35～40，1977.
- 7) 増田久子・貴田康乃：“性格的特性を考慮したグループ学習の授業分析（第1報）  
－調理学習におけるグループ構成員の学習参加度－”，日本家庭科教育学会誌 第28  
巻第3号，pp.19～25，1985.  
貴田康乃・増田久子：“性格的特性を考慮したグループ学習の授業分析（第2報）  
－調理学習におけるグループ構成員の学習協力度－”，日本家庭科教育学会誌 第28  
巻第3号，pp.26～32，1985.
- 8) 田部井恵美子・副島愛子：“調理実習に対する中学生の意識と作業行動”，日本家庭  
科教育学会誌 第33巻第1号，pp.51～58，1990.
- 9) Raymond B.Cattell and Herbert W.Eber（原著），伊沢秀而 山口薫等（日本版）：  
『16PF人格検査手引』日本文化科学社，1982.